

第 10 回青森県気象災害連絡会

日時：平成 22 年 12 月 22 日（水）13:30～16:00

場所：青森地方気象台 2 階防災連絡室(会議室)（青森市花園 1-17-19）

13:30～13:35 開会あいさつ（児玉安正: 弘前大学）

13:40～14:10 水稲の生育・収量・品質に影響を与えた気象要因について（2010 年、青森県）
（清藤 文仁: 青森県産業技術センター・農林総合研究所・水稲栽培部）

14:10～14:30 県内の新聞にみる今夏の高温（多田久）

休憩

14:40～15:10 今年の夏について（渡邊 司 気象情報官: 青森地方気象台）

15:10～15:30 猛暑のメカニズムについて

（児玉安正: 弘前大学）

15:30～16:00 総合討論

16:00 閉会

（敬称略）

要旨

県内の新聞にみる今夏の高温

多田 久

東奥日報、陸奥新報を対象に、2010年夏の高温に関する記事を調査した結果、記事の本数は両紙あわせて8月が26本、9月が22本、10月が20本で、高温がおさまった9月、10月にも記事が多く、高温の影響の大きさがうかがわれる。

記事は気象に関するものから生活、産業にわたって取り上げられているが、農業や水産業に関するものが多い。

記事の内容から、熱中症の発病者や重症化は高齢者に多く、今後高齢化に伴い発病者の増加と重症化が懸念される。また、農業関係では高温対策と低温から高温幅広い気温の対応が必要になると考えられる。水産関係では高温の多発により湾や湖沼では経済活動や生態系に影響のすることも予想される。

今年の夏について

青森地方気象台 渡邊 司 気象情報官

今年の夏（6月～8月）の特徴

今年（2010年）の夏は、日本の平均気温^{*1}の平年差が+1.64 と、夏の気温としてこれまでの記録（1994年の+1.36）を更新し第1位の高い記録となった。

地域別にみると、平均気温は北日本から西日本にかけてかなり高くなり、北日本・東日本で地域平均気温が統計開始（1946年以降）第1位を記録した。

降水量は、北日本日本海側で前線や南からの湿った気流の影響を受けやすくかなり多くなった。

東北地方は、夏の平均気温^{*2}が+2.3 と1946年の統計開始以降最も高くなり、17気象官署のうち12の気象官署で夏の平均気温の最高を記録した。

今年の夏の概況

6月前半は移動性高気圧におおわれ晴れの日が多く、6月後半から7月前半の梅雨時期は、気圧の谷や梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多かった。

梅雨明け後は、日本海側では前線や南からの湿った気流の影響を受けて曇りや雨の続く時期もあったが、日本付近で太平洋高気圧の勢力が強まり晴れの日が多かった。

夏をとおして冷たいオホーツク海高気圧の影響がほとんどなく、南からの暖かく湿った空気が流れ込んだ。

青森市の気温など

青森市では6月から8月にかけて日最高気温、日最低気温、日平均気温ともに平年より高い状態が持続した。

日最高気温 30 以上の真夏日日数は、7月、8月の2ヶ月間で27日と、平年の11.5日を大きく上回ったほか、熱帯夜に相当する最低気温 25 以上の日が3日出現した。(平年は年間0.2日)

記録的には、6月~8月の3ヶ月間の平均気温が 22.8 で観測開始以来第1位、3ヶ月間の真夏日日数が28日で第2位を記録した。

気象的要因

春まで続いたエルニーニョ現象、及びエルニーニョ現象が終息後すぐに発生したラニーニャ現象の影響で北半球の中緯度帯の対流圏の気温が上昇した。

あわせて、ラニーニャ現象の影響で太平洋高気圧の勢力が強く、亜熱帯ジェット気流の位置が例年より北に位置したこと、日本付近で北に蛇行したことで暖かい空気が日本付近に流入しやすい状況となった。

また、冷涼なオホーツク海高気圧の発生が少なかったこと、8月に入ってから上層の高気圧の一つであるチベット高気圧が日本の上空へ張り出し、太平洋高気圧の勢力を一層強めたことなどで気温の高い状態が長く続いた。

以上

*1：日本の平均気温は、都市化による影響の少ない17地点の気象観測所のデータをもとに算出されており、統計開始は1898年となっている。

*2：東北地方の17の気象官署のデータより算出。

猛暑のメカニズムについて

児玉 安正 (弘前大・院・理工)

2010年の夏は大変な猛暑となり、青森県では陸奥湾で養殖されているホタテに大変な被害が発生するなど農水産業に深刻な被害が発生した。この猛暑について、平成19年に発足した気象庁異常気象分析検討会が要因の分析を行い、速報を発表している。そのうち、北半球中緯度の対流圏の気温に関する部分について解説した。要点は以下の通り：2010年の夏、北半球中緯度の対流圏の気温は、1979年以降の夏(6~8月)で最も高くなった。この背景として、エルニーニョとラニーニャの影響が指摘できる。対流圏の気温はエルニーニョ現象終了後に全球的に上昇し、数ヶ月間高い状態が続くこと、またラニーニャ現象が発生している夏には、北半球中緯度の気温が高くなる傾向が知られている。2010年には春にエルニーニョが終了し、夏にラニーニャが発生したため、2つの昇温効果が重なって高温になった可能性がある。また北半球中緯度の対流圏の気温は長期的に上昇していることも背景として指摘できる。これには地球温暖化が関係している可能性がある。